

問題・解答  
用紙番号

45

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者

理工学部（生命科学科）、看護学部、農学部〔注〕文系科目型を除く

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。（一〇点）

- 1 大学のゼミで外国語の論文をジュクドクする。
- 2 都市環境問題を解決する会社をキギヨウする。
- 3 大阪でキンコウ農業に取り組みたい。
- 4 文化遺産ホゴに向けた課題を解決したい。
- 5 どんなに困難でも夢がかなうまでアキラめない。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

柳原の『味をたずねて』は書籍になる以前に日本経済新聞で七七回にわたって連載されて好評を博していた。読者の多くは、知らない地域や食を知る楽しみを得るというよりも、かつて離れた故郷を思い出し、母の料理や祭りの料理を思い出して懐かしんでいたのだと思われる。柳原が資料を集めて全国を歩き始めたのが昭和三〇年代だいうから、ちょうど集団就職列車が盛んに走っていた頃の各地の風景が、『味をたずねて』には書き留められたことになる。

金の卵と呼ばれた彼らが辿り着いた東京やその周辺の地域もまた、急速に変化を遂げている最中であつた。例えば千葉県浦安町(現・浦安市)は次のように記録されている。

東京湾を江戸前とよんで、磯の香をふくんだ新鮮な魚貝が河岸<sup>かし</sup>あげされたのは、いまでは昔語りになってしまった。「…」京浜地区が工業地帯になると同時に、この方面の海<sup>の</sup>苔<sup>り</sup>場や漁場がつぶれ、続いて京葉地区の埋め立てによって東前の漁場も虫の息になってしまった。しょせん東京湾の汚水には魚がすめなくなったのである。

こんな悪条件の中で、東京の下町には自転車の荷台にカゴをのせて、「あさり、はまぐり」と売り声をあげてゆく貝売りを見かけることがある。どこから来たのとたずねると、浦安ですとこたえる。江戸前の潮の香をほそぼそながら東京の町へ送り込む浦安とはどんな町なのであろうか。「…」

浦安の町は「むき身屋」の町といってよいほど、むき身業者が多い。「…」  
ぼつりぼつりと靴底でつぶれる貝殻の音を聞きながら、夕景の町をあとにしようとすると、  
焼きはまぐりのたれの匂いが空腹の鼻をかすめてきた。

昭和三〇年代、京浜工業地帯の立地や、京葉地区の埋め立てなど、すでに地域は大きな変化に直面していたが、それでも貝売りの売り声や焼きはまぐりの匂いは残っていた。しかし、それから間もなく始まる高度経済成長は浦安の町をさらに劇的に変えていく。著書『味をたずねて』の文庫版あとがきで、柳原は次のようにその急速な変化を語っている。

十年一昔という。時の移りかわりとは不思議なものだ。『味をたずねて』を日本経済新聞社から出版したのが昭和四十年四月。資料を集めながら味の旅に出たのがそれより先、昭和三十年頃からである。高度成長の波に乗って日本列島の風物までが、これほど変貌しようとは考えなかったが、そろそろそのきざしは見えていた。「…」

一例をあげれば、見出し「潮の香匂うむき身屋の町」の千葉県浦安にしてからが、漁場はすっかり埋め立てられ、マンションや公団住宅が密集して都市化が進み、東京都心とは地下鉄の東西線で結ばれ、二十分足らずの便利さとなった。かつての海苔を干す潮風の香りも、道路

にふみしだく貝殻の音も、1。

それはただ単に土地利用が変化したのではなく、この地域を舞台とした暮らしと季節の移ろい、土地の恩恵と制約とともに生きる人びとの姿が消えていく過程でもあったのだと実感される。地域に根差した味は今、僅かに残っているに過ぎない。焼きはまぐりのたれの匂い、海苔を干す潮風の香りは遠く記憶にとどめられるのみである。そして間もなく一九八三（昭和五八）年の東京ディズニーランドの開園によって、浦安はさらなる変化を経験することになるのである。

確認しておかなければならないのは、2 のはどういう人びとであったか、ということである。先述した集団就職で都市へやってきた若い労働者たちであろうか。おそらくそうではないだろう。当時の日本経済新聞の読者としては、高度経済成長期に増加した大卒者のいわゆるサラリーマンたちが想定される。彼らの中にもまた、故郷を離れた者が多く含まれていた。

一九六五年の二〇（二四歳）人口九〇六万八八八九人のうち、同年に大学を卒業したのは一六万二三四九人であったので、全体の一・八％に過ぎないが、大学への進学をきっかけに故郷を離れ、卒業後そのまま都市部に立地する企業へ就職した場合、その後も長く、故郷には帰らない人生を送るようになった。そうした人生を選んだ彼らもまた、「味」を通して故郷に想いを馳せる一人にほかならなかった。全国津々浦々のふるさとの味、つまり、おふくろの味を記事にした「味をたずねて」が日本経済新聞に掲載され続けたこと、それが書籍になったことがその証左であろう。

高度経済成長期は二重の労働市場によって支えられたといわれている。一つは先述した集団就職によって都市に集まってきたいわゆるブルーカラーの人びとの層である。そしてもう一つはホワイトカラーのサラリーマンの人びとの層である。学歴や職種は違っても、彼らの多くは進学や就職のために故郷を離れたこと、それゆえに望郷の念を「味」に映し、故郷に想いを馳せる経験を持っていることは共通していたと思われる。

これはまだ私見に過ぎないが、地名食堂と類似した食堂、つまり「おふくろの味」を謳い文句にした居酒屋や定食屋の誕生は、高度経済成長期の都市で働いていた、離郷した人びとの分厚い層の存在と、彼らの膨大な数の胃袋、そしてそこに付随する「3」が揃って初めて成り立つものであったといえるのではないだろうか。

X、成長著しい高度経済成長期における都市が、「おふくろの味」を発見するための、重要な場と機会を人びとに与えたといえるのである。

都市がおふくろの味を発見し、野暮なものから永遠性をまとうものへと変化させてきたことが明らかになった。その論理について、もう少し踏み込んで考察しよう。

地理学者のイーファー・トゥアンは、「物質的環境と人間との情緒的なつながり」を、「トポフィリア」（場所愛）という新造語で説明している。それは、「場所」に対する愛着と言い換えることもできるだろう。

「場所」という概念について、少し補足しておこう。空間と場所は人間が生きている世界の基本的な構成要素であり、空間とは自由性を、場所とは安心性を表象している。空間は場所よりも抽象的な概念であり、私たちは様々な経験を通じて抽象的な空間を、具体的な場所として認知していく。つまり「空間」は、主体により、経験によって限定され、意味を与えられていくにつれて「場所」へと変化していくのである。それゆえに、私たちは空間には憧れを抱き、場所には愛着を抱くようになる。それが「トポフィリア」である。

トポフィリアを形成するのは、様々な経験である。そこには味覚、嗅覚、皮膚感覚、聴覚、触覚、視覚などが含まれ、私たちはそうした経験を通じて「場所」への愛着を深めていくのだと、イー・トゥアンは論じている。その経験とは、例えば、空気や水や土の感触からもたらされる喜びのように触覚的なものであるかもしれないし、故郷や思い出の場所であるという理由から人が場所にある特定の感覚を持つことを意味している場合もある。

触覚と視覚は主に「空間」を認知し、そこに味覚、嗅覚、皮膚感覚、聴覚が組み合わさって、世界の空間認識を豊かにし、それが「場所」の愛着へとつながる。イー・トゥアンの言葉を借りれば、「われわれがある物体や場所を全体的に経験するとき、つまり活動的で思索的な精神の知的働きを通じて経験するだけでなく、すべての感覚をも通じて経験するとき、その物体や場所は具体的な現実性を獲得する」のである。

これは人間が「知性」を備えたがゆえに得た能力の一つで、私たちはある特定の物体や場所を永続的に認識し、自らの内的な世界地図に埋め込むことができる。それゆえに、特定の物体や場所がその場になかったとしても、それへの愛着を「象徴」として呼び起こすことができるのである。

人間は環境を特定の経験を通じて認知し、自分にとって抽象的な「空間」を具体的な「場所」へと読み替えることができ、さらに「トポフィリア」へと昇華させる。これを「おふくろの味」に当てはめて考えてみよう。

トポフィリアの形成を促す経験に「味覚」が含まれていることは重要である。つまり、「おふくろの味」は、ある特定の皿に盛られた実際の食べものから味覚を通じて得た経験であると同時に、その経験を通じて形成されたトポフィリア（場所愛）であり、一種の「象徴」でもあるということができる。その象徴はある特定の故郷ということもあれば、その故郷をさらにメタレベルで表象する「おふくろ」という心理的な場所を意味している場合もある。これが「野暮」から「永遠性」へと変化するプロセスである。

心理的な場所としての「おふくろ」という表象とはすなわち、<sup>B</sup>「母なるもの」あるいは「母性」への思慕である。例えば母なる大地、母なる海、母なる地球という表現も同様で、心理的に帰る場所、あるいは懐深く受け入れてくれる場所を意味している。

しかしこれは、「母」が優しく全てを受け入れてくれるものであるという前提があって初めて成

り立つ論理である。帰る場所は父ではなく、あくまでも「母」であるという点に注目すると、ジェンダーの問題と深く関わっているといえそうである。はたして「母」は、本来的に疑うべくもなく、優しく、全てを受け入れてくれる存在なのだろうか。

近代日本における「母なるもの」について論じた大野雅子は、優しい「母」に対する慕情は超歴史的、普遍的な感情ではなく、近代の構築物であったのではないかと考察している。それと関連して「おふくろの味」もまさに、近代の構築物であり、その味を懐かしむ心もまた、人間が生まれながらに持っている本質的な感情ではないと論じている。

「母なるもの」が過大に評価され、絶対的な思慕の対象になっていく背景には、近代に「家庭」という言葉が誕生し、「良妻賢母」という理想を掲げた近代女子教育の展開があった。こうした歴史的背景の中で、「母なるもの」としての味、すなわち「おふくろの味」がトポフィリアの対象としての心理的な場所となっていたのだと考えられる。

「おふくろ」が心理的な「場所」、ひいてはトポフィリアの対象になり得るのは、幼い子どもにとって、親（世話をしてくれる庇護者）が第一の「場所」となることに起因している。大野の議論に照らせば、その庇護者が「母」という「女性」であるということもまた、近代の構築物であることに気づく。

乳児の空間は、乳児が対象物と場所を認識し、それらに手を伸ばしていくにつれて拡大し、分節化されていく。<sup>C</sup>空間が特別な「場所」になっていく過程では、私たちの存在の最も奥深いところに埋もれている様々な「親密な経験」が関係しているとイーファー・トゥアンは説明する。その場所は生きる「根拠地」、安全を求める「避難所」として認知される。具体的にはまず第一に庇護者としての「母」、そして「母なる」家や故郷の存在がそれに当たる。

例えば人間は家を、病気や怪我を回復できる場所であると考えており、そこで一旦立ち止まり、休止する。この立ち止まるという行為が、場所に対する人間の感情の深さをさらに強めるのだという。こうした空間と場所の認識過程では、個々の人間の中でカルトグラフィ（地図作成）が展開される。Y、根拠地、避難所としての「おふくろ」という意味を増幅させ、それが「望郷」や「郷愁」という態度へと結びつくのだと説明することもできるだろう。

イーファー・トゥアンの議論で興味深い点はもう一つある。それは、人間が持つ場所への「態度」にはいくつかのパターンがあるという指摘である。例えば、家や都市や国家への忠誠は強力な感情を伴うことと対照的に、田園はもっと散漫で感傷的な気分を呼び起こす。都市と田園に対するトポフィリアは個々の人間の認知によって形成されるというだけでなく、都市と田園という「対立物」、つまり反対のイメージが存在するからこそ成り立っている、というのである。イーファー・トゥアンは次のように言う。

社会がひとたび巧妙さと複雑さをもったあるレヴェルに達すると、人々は自然の相対的な単

純さに注目し、それを評価し始めるようである。「…」田園に対するこの種の感情は、大都市が建設された時、つまり政治的・官僚的な生活のストレスが田舎の生活を魅力的に見せた時に、初めて現われることができた。この感情は空想的な感覚であり、自然のどんな現実的理解からもかけ離れたものであった。

ということとは、都市が誕生して初めて、田園や故郷に対するトポフィリアが生まれるということになる。しかもそれは、現実というよりも空想的な感覚、つまり幻想として立ち現れてくる。これは、太平洋戦争後のとりわけ高度経済成長期に成長し、複雑さを増した都市という空間と、そこに生きる人びとが「おふくろの味」を見出し、価値づけていくプロセスと共通している。

（湯澤規子『「おふくろの味」幻想——誰が郷愁の味をつくったのか——一部改変）

\* 地名食堂……著者の造語。食堂の名称に、提供している郷土料理の地名が含まれるもの。

問一 空欄 

X
---

 ・ 

Y
---

 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

X	ア	ついに	Y	ア	せめて
	イ	しかも		イ	そして
	ウ	または		ウ	やはり
	エ	むしろ		エ	まして
	オ	つまり		オ	ただし



問二 空欄

1

3

に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| 1 ア まだまだ当時のままである | 2 ア 浦安を故郷として暮らしていた |
| イ 一昔前の詩情として消えた   | イ 地域に根差した味を覚えていた   |
| ウ 街の新たな風物詩になった   | ウ 高度成長期に日本の風物を変えた  |
| エ ますます活況を呈している   | エ この記事を読んで懐かしんでいた  |
| オ 浦安市の名物として残った   | オ 土地の恩恵と制約とともに生きた  |

3 ア 味を通した郷愁

イ 母の料理や祭りの料理

ウ 故郷へは帰らない人生

エ 集団就職の経験

オ 東京の食を知る楽しみ

問三 傍線部A「トポフィリア」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びな

さい。

ア トポフィリアとは、自分が生まれ育ったことで根拠地や避難所としてみなしうる特定の場所への「母性」を指す。

イ トポフィリアとは、特定の物体や場所ではなく、「象徴」として呼び起こされた抽象的な空間への愛着を指す。

ウ トポフィリアとは、人間が永続的に認知するとともに自らの内的な世界地図に埋め込んだ「場所」への愛着を指す。

エ トポフィリアとは、「場所」が経験によって限定され、意味を与えられていくにつれて「空間」に愛着を抱くようになる一連のプロセスを指す。

オ トポフィリアとは、特定の物体や場所を永続的に認識し、自らの内的な世界地図に埋め込む「知性」を指す。

問四 傍線部B「母なるもの」あるいは「母性」への思慕」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 日本社会では古代から、病氣や怪我を回復できる場所として家を捉えていたため、「家庭」や「良妻賢母」はながらく重要な概念であった。

イ「おふくろの味」は近代の構築物であり、その味を懐かしむ心もまた、人間が生まれながらに持っている本質的な感情ではない。

ウ「母なるもの」が過大に評価され、絶対的な思慕の対象になっている背景として近代のトポフィリア教育が挙げられる。

エ「母」とは、本来的に疑うべくもなく、優しく、全てを受け入れてくれる存在であるため、「おふくろの味」は、「望郷」や「郷愁」という態度へと結びつく。

オ「おふくろ」が心理的な「場所」、ひいてはトポフィリアの対象になり得るのは、大人になることで親が第一の「場所」となるためである。

問五 傍線部C「空間が特別な「場所」になっていく過程」はどのようなものか。乳児の事例について六十五字以内で説明しなさい。

問六 次のア～オについて、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア 昭和五〇年代に「金の卵」と呼ばれていたのは、農村地帯で集団就職した人々である。

イ 高度経済成長期以前の農村は、「おふくろの味」を発見するための重要な場と機会を人びとに与えた。

ウ 高度経済成長期の労働市場は、都市にやってきたブルーカラーの人びととホワイトカラーのサラリーマンの人びとによって支えられた。

エ 大野雅子の説では、都市が誕生して初めて、田園や故郷に対するトポフィリアが生まれ、幻想として立ち現れてくる。

オ 地理学者のイーファー・トゥアンの説では、私たちは多様な経験を通じて「場所」への愛着を深めていく。



Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

人間の手はどんどん貧しくなっている。インカ帝国の装身具や中世のタペストリーを見て、われわれはそう思う。むかしの人は器用だったんですね。年末恒例の蚤の市でみつけた骨董品の見事な細工を見て、われわれの時代はもう、これと同じものを生み出すことができなくなってしまったのだと、<sup>i</sup>忽然と悟るのだ。博物館に漂うある種の寂しさは、もしかすると一種の喪失感に根を付けているのかもしれない。

しかしそんな感情をいだいた最初の人間が、いったいどの時代に現れたのかは分からない。意外に松明の光で洞窟画を描いていた人々が、すでにそう感じていたかもしれない。最近の若い奴は、狩りは下手だし、野牛ひとつ満足に描けねえ、と。

それでも今世紀ほど、手仕事の世界が縮小してしまった時代はなかった。高度技術社会とは、手間を省く社会である。もはや例をあげるまでもないだろう。身の周りにあるボタンの数を数えてみればよい。手間も暇もないわたしの手は今日それではいったい何をしたか。何を作り出したか。

だがその貧しさに、悩むこともなくなった。狩り<sup>ゲーム</sup>が培った繊細な感覚はとうの昔に失われている。今日のゲームボーイに要求されるのは、ボタンを押すタイミングだけである。その貧しい百万の手が、全体でひとりの人間の手のようにキーを叩いているという光景に驚く人間も、もういない。

古生物学、形質人類学、先史学の諸成果を基礎にして、生命の起源から現代文明までの人類の営みが絶えざる〈解放〉の歴史であることを明らかにした大著『身ぶりと言葉』のなかで、アンドレ・ルロワ＝グランは、「手の運命」と題して次のように書いている。

「

X

」

ルロワ＝グランは、この退化の問題を単に身体器官の問題としてではなく、広く言語と映像の関係のなかで考察している。その大胆かつ精密な考察は、技術と文明の到達点が環境との関わりにおいて危機的な段階に達している今日、いくつもの新鮮な視点を与えてくれるのだが、われわれはこれに加えて手の問題を、人間と現実の認識との関係のなかで扱ってゆくことにしたい。手が触覚をつかさどるもつとも重要な器官である以上、その〈退化〉は触覚に変化をおよぼさずにはおかないはずである。あるいは逆に技術社会のなかでの触覚あるいは皮膚感覚の変化が、すなわち手の〈退化〉として現れているのかもしれない。それはまさしくわれわれが「現実の感触」と言うとき、手触りの問題である。

しかし消えつつあるのは手のほうなのか、それとも現実のほうなのだろうか。皮膚は不感症にかかっているのか、それとも過敏症なのか。いったいわれわれの触覚に何が起きているのか。とりあえず「何もできない」かどうかの判断は、保留することにしてよう。まず世界に触れて現実を感じる、

その感じ方から始めたい。

世界が現実のものとして存在するのを確かめる、もつとも簡単な方法として、われわれは手で頬をつねったり、ひっぱたくということをする。痛みを感じれば、それは現実であり、痛くなければそれは夢か幻想である。現実の識別法というよりは、一種のおまじないかもしれない。だが視覚や聴覚でなく触覚が使われるというのは、われわれが触覚のこの面での役割を経験的に知っているからだろう。

<sup>A</sup>痛みとは何か。国際疼痛学会の定義によれば、痛みとは「組織の実際のあるいは仮想の損傷をとまなう、知覚的および情緒的に不快な経験」となる。この定義には、ここ二十年あまりの痛みに関する研究とそれによって得られた新しい知見が要約されている。まず痛みは、実際の組織の損傷だけでなく、仮想的な損傷によっても引き起こされる。例えば腕や足が切断されて、失われているにもかかわらず激痛を感じる、幻肢痛とよばれる痛みの存在が知られている。痛みは知覚だけでなく、情緒的な経験でもある。つまり末梢<sup>まつしょう</sup>からの刺激だけでなく、痛みを感じる主体の思考や感情、動機などによっても左右される経験である。

従来、痛みはデカルトによる有名な「火の粉理論」によって基礎づけられて以来、痛覚の伝導路を通じた刺激と反応の相関関係としてとらえられてきた。痛みの感覚を生む神経終末は大部分の器官に存在しているが、特に皮膚そして内臓に分布している。これらの神経終末は温度や圧力などの外部からの刺激だけでなく、生体内部で作られ出される化学物質にも反応する。この反応が「痛み」として大脳へ伝わるまでのプロセスは、おおよそ次のようになる。

むきだしのまま枝分かれしているこれらの樹状突起の最終分岐が刺激を受けると、インパルスが引き起こされ、それが神経にそって伝播<sup>でんぱ</sup>してゆき、脊髓神経節に達する。「痛みのニューロン」はそこから軸索を大脳へと上行させる介在ニューロンとシナプスを形成する。この「痛みのニューロン」は刺激を受けると、サブスタンスPと呼ばれる化学物質を放出する。この物質は脊髓のレベルにおいて大脳まで達するインパルスを引き起こす、痛みの伝達物質なのである。

このような痛み特有の末梢における刺激とその伝達という、一方通行路の特異的關係で考えられてきた理論に対して、痛みを末梢と中枢とのインタラクティブな関係としてとらえることを可能にしたのが、一九六五年ロナルド・メルザックらによって唱えられた「ゲート理論」である。

「ゲートコントロール」<sup>g</sup>とも呼ばれるこの理論の鍵は、痛みの活動が発発される前に、刺激の量をコントロールする閥門システムを想定したところにある。刺激は太さの異なる二種類の神経繊維を通じて伝達され、ゲートはこれらを通る刺激の量に応じて開閉される。太い神経繊維からの刺激がゲートの閉鎖、細いほうがゲートの開放に働き、その状況に応じて中枢からの指令によってゲートの開閉が行われるのである。ゲートが開いて、脊髓の介在ニューロンに伝えられた刺激が、あるレベルに達してはじめて、痛みに関わる活動システムが活性化されることになる。

この理論の利点は、実際に痛みの刺激がなくても、ゲートの開閉状態のバランスが崩れることによって、痛みの活動が起こってしまうことを説明できるところにある。たとえば幻肢痛は、末梢ではなく、ゲートにおける問題として理解できる。またゲートの開閉が中枢神経によるコントロール下にあるということは、それが思考や感情といった中枢神経の他の活動の影響を受けることも示唆している。痛みに関与しているのは、ある特定の中枢ではなく、認知や思考や情緒などのさまざまな精神活動である。したがって痛みを解明するには、生理学的なメカニズムだけでなく、心理学的な要素をも考慮に入れなければならないことになる。

またサブスタンスPが痛みを伝えるのであれば、この物質の生成を阻害する<sup>ii</sup>ことによって痛みを止めることができることになる。例えばもつともよく知られている鎮痛剤のひとつモルヒネに含まれるケシの抽出物、モルフィンの働きはこのメカニズムに沿って説明されている。すなわちモルフィン<sup>iii</sup>は末端において、痛みの神経からサブスタンスPが放出されるのを抑制するのである。

痛みを含めて神経生理学はあらゆる感覚の物質的基礎を解明しつつあるが、近年は喜びや怒りといった感情までもが、化学的なメカニズムとして説明されるようになってきている。それらの研究成果がとりわけ興味深いのは、感覚や感情の物質的基礎の解明が、現代人の感覚や感情のコントロールと直接リンクしていることである。

例えば、この分野の先端的研究者のひとりであり、発表当時、専門分野をはるかに越えて、哲学から芸術の分野にまで大きな衝撃を巻き起こしたジャン・ピエール・シャンジューの著書『ニューロン人間』は、世界でもっとも売れている薬物であるベンゾジアゼピン類の抑制メカニズムの説明で終わっている。

「これらのマイナー・トランカイザーは抑制性の神経伝達物質γアミノ酪酸の脳の受容体のレベルで作用する。その効果を強めると、これらの薬物は不安をはずめ、睡眠を助けてくれる。フランスでは月に七〇〇万ケースが売られているが、工業国の大部分でも同様の数字が出されている。大人の四分の一が化学的に自らを鎮静化しているのである。」

神経伝達物質のコントロールは、そのメカニズムが解明されるはるか以前から行われていたし、アヘンに代表されるように薬物の使用は時代と民族をこえて多くの例が報告されている。しかしここで指摘されているような、量的に大規模でしかも組織的な生産と消費は、今日にいたるまでなかった。しかもこの数字が示しているのはコントロールの「鎮静側」の一角であり、もう片側には「覚醒」すなわち工業国の大部分で使用されている「ドラッグ」と総称される化学物質の量塊がある。

こうした状況に対する一般的な批判は、薬物の使用は「現実からの逃避」であるというものだ。単純ではあるが、含蓄のある表現である。なぜなら神経伝達物質およびそのコントロールが、現実との関係においてとらえられるべき問題であることを示唆しているからだ。コカインをめぐって国

家規模の戦争が起きるのを、“国際経済における南北の歪み”として説明することはたやすい。しかしその末端で進行している、人間にとつての現実の変容を考えることなしには、真の問題の所在を明らかにすることはできないだろう。

<sup>B</sup>痛みがなくなれば、現実も消える。とすればわれわれにとつてサブスタンスPの同定は、結論ではなく、むしろ出発点として考えなければならない。人間がニューロンとシナプスの集合にはかならないのであれば、それだからこそ、そのような人間が存在してゆくときに、どのような現実が立ち現れ、またどのような世界が可能であるのかを考えなければならないだろう。

痛みの物質的基礎はあらゆる人間に対して適用されるが、<sup>C</sup>痛みの受容には大きな個人差がある。しばしばスポーツ選手が試合中に負った怪我を、ゲーム終了後になつてはじめて意識するといった現象は、一個人のなかでも時と場合によつて痛みの感じ方が異なることを示している。また苦痛の受容は個人の力で変えることができるものであり、その実践がさまざまな〈修行〉として体系化されていることをわれわれは知っている。

現代社会においてふつう痛みは医学の領域で扱われ、ここでは痛みの除去が目的となるわけだが、たとえば苦痛に耐えることが要求される通過儀礼が、現在でも多くの社会において実践されていることもまた事実である。したがつて痛みは物質的にはいくつかのメカニズムに還元されるが、その表現は実に多様なかたちをとることになる。この場合苦痛をひとつの文化として考えることは可能かもしれないが、視覚文化や聴覚文化を扱うようにはいかないだろう。皮膚が人体をくまなく覆うように、その感覚は表現活動の全領域を覆っている。視覚芸術としての絵画や聴覚芸術としての音楽に対応するようなひとつの表現形式を触覚に求めても無駄である。同様に触覚が集中する手は、あらゆる活動の基礎なのだから、触覚だけを独立させてその表現形式を考えることはできない。

ここには、長いあいだわれわれを支配してきた、ひとつのモデルがある。皮膚は肉体を包む袋であると同時に、外界からの情報を受ける感覚器官でもある。例えば痛みのメカニズムですで見たとように、火の粉の刺激は、皮膚という〈末端〉から脳という〈中心〉に伝えられる。そこに火があるという現実を把握するのは、あくまで人間の〈中心〉である。火傷の感覚や火のイメージや炎から受ける感情といった、人間の精神活動を理解するには、この〈中枢〉の働きを明らかにしなければならない。したがつて身体の〈周縁〉を構成する皮膚は、人間の本質には関わらない。皮膚は人間の表面であり、その本質はその奥深いところに隠されている。皮膚は非本質的である。

これから考える触覚文化とは、<sup>D</sup>このモデルを逆転するものだ。ここでは皮膚は単なる袋でも、また中枢に仕える末端でもない。皮膚と脳は階層的な関係ではなく、<sup>\*</sup>トポロジックな関係としてとらえられる。皮膚は従属的ではない。皮膚を脳のひろがりとして、脳を折り畳まれた皮膚として考えてみなければならない。本質は皮膚にある。

触覚文化が重要になってくるのは、したがつて現実の存在ではなく、現実の生成においてである。

その意味では、われわれはそれをまさに手探りで求めることになるだろう。

(港千尋『考える皮膚——触覚文化論』一部改変)

\* トポロジックな関係……「トポロジ」とは「位相幾何学」の意である。ここでは複数の物体が、切断や接着ではなく、延長や湾曲といった連続的变化で捉えられる状態を示す。

問一 波線部 i―iii の言葉の意味として最も適切なものを、次のア―エのうちからそれぞれ選びなさい。

i 忽然と

ii 阻害する

ア たちまちに起こるさま

ア 取り出して省く

イ ぼんやりとするさま

イ 擦って消す

ウ 遠くにかすむさま

ウ 区別して除く

エ はっきりとあざやかなさま

エ 隔てて遮る

iii 含蓄のある

ア 表面に直接現れない意味を持つ

イ 意味ありげに期待を抱かせる

ウ 学問や知識を深く蓄えている

エ 物事の事情を推し量らせる

問二

空欄

X

には次の五つの文が入る。正しい順番に並び替えたとき、二番目と四番目に来る文はどれか。次のア―エのうちから選びなさい。

ア それゆえ、種の次元ではないにしても、個人の次元で現在すでに手の退化の問題が出ているのである。

イ 十本の指で考える必要がないというのは、正常な系統発生学的な意味で、人間的な思考が一部欠落するということである。

ウ というのは、これほど古い神経運動器官が退化するには、何千年もかかるからである。

エ しかし個人の次元では、問題はまったく別である。

オ 十本の指で何ひとつできないということは、それほど心配なことではない。



問三 傍線部A「痛みとは何か」とあるが、痛みについて述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選えびなさい。

ア 国際疼痛学会による痛みの定義は、幻肢痛というあたかも腕が失われてしまったかのような激痛を覚えることにも合理的な説明をつけている。

イ デカルトによる痛みの仮説によると、痛みとは痛覚の伝導路を通じた刺激と反応の情緒的経験として理解することができる。

ウ 痛みを一方通行路の特異的關係で捉えるならば、サブスタンスPは神経終末への刺激で引き起こされたインパルスが生成する化学物質である。

エ ゲート理論によると、痛みに関わる活動システムの活性化には、太さの異なる二種類の神経繊維が重要な役割を果たしている。

オ 心理学的な要素を考慮に入れるとすれば、幻肢痛という症状が思考や感情といった要素と関連して引き起こされると考えられる。

問四 傍線部B「痛みがなくなれば、現実も消える」とあるが、感覚をコントロールすることについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選えびなさい。

ア コカインを起因とする国家規模の戦争が人類にもたらす痛みを、現実の変容と結び付けて考察しなければならない。

イ 現代では少なくないひとが神経伝達物質をコントロールすることで、自らを化学的に沈静化していると指摘されている。

ウ 感覚の物質的基礎を説明する神経生理学の進歩は、喜びや怒りといった感情の化学的メカニズムさえも明らかにしつつある。

エ 感覚や感情の物質的基礎の解明とは別に、アヘンのような薬物は、時代と民族をこえて使われてきた。

オ ケシから抽出されるモルフィンは、痛みを伝える物質の生成を阻害することによって痛みを抑制する。



問五 傍線部C「痛みの受容」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア スポーツ選手は試合中に負った怪我の深刻さを、痛みの度合いによって即座に測ることができる。

イ 現在でも多くの社会で実践されている通過儀礼のなかには、痛みに耐えることを要求するものがある。

ウ わたしたちは、苦痛を受け止めて耐えることを通して、個人の力を変えられることを知っている。

エ 苦痛に耐えるよう強制する通過儀礼と痛みの除去を目的とする医学は緊張関係にあり、しばしば衝突する。

オ 痛みの受容のメカニズムをふまえるなら、触覚文化を視覚文化や聴覚文化と同列に語ることが可能になる。

問六 傍線部D「このモデル」とはどのようなものか。「皮膚」・「脳」の二つの語を必ず用いて、六十五字以内で答えなさい。

問七 次の文は、本文中のいずれかの段落の末尾にあるべきものである。その段落の最初の五文字を抜き出しなさい。

夢とうつつの境で、百聞にも一見にもまさるのは、一痛なのである。